

聖霊降臨の主日 A年

「聖霊を受けなさい」

神のことばを味わい、祈る、生きる



ミサ典書「聖霊降臨」、1310-1320年、ウェールズ国立図書館所蔵

聖霊降臨の主日を迎えて、今日の神のことばを注意深く読んでみると、「霊」と関係していることばが、たくさんあるということに驚きました。第一朗読に2回、答唱詩編に3回、第二朗読に5回、アレルヤ唱に1回、福音朗読に2回、合計13回。それほど数多く「霊」のことばは使われていることには理由があります。その理由は、答唱詩編にあると思います。「あなたが息吹を取り去られると、死が訪れてちりに戻る。あなたは霊を送ってすべてを造り、地上を新たにしてください」。すべての人には、神の聖なる霊が注がれていなければ、ちりに戻り、霊が与えられると愛に生きるのです。入祭唱にあるように、「わたしたちのうちにおられる聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれた」のです。

聖書全体を見ると、「聖霊」の名称は旧約に400回、新約には200回以上出てきます。今日祝う聖霊降臨の神のことばを味わい、祈り、生きることによって、日常生活において、聖霊に導かれて生きることができるようになります。

第1朗読 (使徒言行録2・1～11)

味わう

* 新約聖書は、旧約聖書に照らして読む必要があると言われていています。ルカはその原則通りに、聖霊降臨の描写の背景に、旧約聖書の3箇所を想起させます。

① 家の中の響き、舌の形をした炎は、シナイ山で神がモーセに神の民として生きるための律法を与え、契約を結ばれたことを思い起させます(出エジプト記19・16～19)。聖霊降臨は新しい契約であり、神に結ばれて生きるために、神はご自分の霊を使徒たちに、わたしたちに与えくださいました。喜びをもって、自由な心で生きるために欠かせない神の掟は、石の板にではなく、人間の心に刻まれました。

② 今日の朗読をちょっと欲張って、聖書を開いて17節まで読むと、聖霊降臨の背景に、預言者ヨエルのことばがあると分かります。「わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、わたしは奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ」(ヨエル3・1～2)。聖霊降臨の時、そして今も、神はすべての人に霊を注いでくださいます。

③ 神がモーセにシナイ山で律法を与えてくださったことを祝う五旬祭のため、いろいろな言語で話すユダヤ人がエルサレムに集まってきた背景に、バベルの塔の話があります(創世記11・1～8)。神は、一つの言語、一つの文化、一つの思想、一つ企画などの一様な世界ではなく、バベルの塔の時のように、多様性のうちに一致を求める人々の世界を望んでおられます。

生きる

* 新約聖書を理解するために、旧約聖書をも読んでいますか。できれば新約聖書と旧約聖書の関連箇所を示している「聖書協会共同訳」のような聖書を使うと便利です。

* 使徒たちのように、聖霊を受け、人々のことばで「神の偉大なわざを語る」使命への確認が必要。

* すべての人の内に聖霊の働きがあります。自分のうち、相手のうちに働かれる聖霊の声に耳を傾けましょう。

* 相手の違いを受け入れるように努めましょう。

祈る

* 集会祈願にあるように諸国の民を一つの聖なる教会に集めてくださる神に心を向けて祈ります。

* 聖霊を、世界に、教会に、家族に・・・あまねく注いでくださるように。

* 救いの喜ばしい知らせを人々に、行いとことばを通して示すことができますように。

答唱詩編 (詩編104・1b、24、29～31、34)

聖霊降臨の日に、エルサレムに集まった巡礼者のことばで使徒たちは、神の偉大なわざについて語っていました。わたしたちも、神の愛による創造の素晴らしさを、詩編104のことばでほめたたえましょう。この詩編に、「あなた霊を送ってすべてを造り、地上を新たににしてくださる」ということばがあるので選ばれたのでしょう。

* 神は、すべてを英知に満ちて造られました。「造られた」と過去形の動詞です。しかし実際に、神が「息吹を取り去られると、死が訪れてちりにもどる」と体験している詩編作者は、神の創造のわざが過去に行われたとはいえ、今も、神はすべてのいのちを愛とみ摂理で支えてくださっていることを伝えているのです。わたしたちは毎日の忙しい生活において、神を忘れることが多いのですが、神は決してわたしたち一人ひとりをお忘れすることがありません。「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまな

いであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける」(イザヤ 49・15～16)。

* 教皇フランシスコが回勅『ラウダート・シ』(2015年)で述べるように、「世界は愛のこもった神の贈り物であるということ」が、この詩編を通してよく分かります。

* 毎日の生活を通して、「神がみわざを喜ばれますように」、そして「わたしたちの思いが神の喜びとなりますように」祈りましょう。

第2朗読 (一コリント 12・3b～7、12～13)

味わう

* 共同体の分裂、嫉妬心、争い、みだらな行為、偶像にささげられた肉の取り扱いなどの問題を抱えていたコリントの共同体に対し、パウロは教会の本質について触れて語ります。

「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは**同じ霊**です。

務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは**同じ主**です。

働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは**同じ神**です」

* 同じ霊に満たされて、同じ主イエスを信じて、同じ父なる神に向かって歩んで行くことを喜びとします。

* 教会は縦社会ではなく、兄弟姉妹の横のつながりを生かして、多様性の中の一致を求めます。

祈る

* 皆の利益のために与えられている賜物を使うことができますように。

* 人種、言語、社会的な身分の基準ではなく、同じ霊、同じキリスト、同じ神に愛されている共同体になるように祈ります。

生きる

* 「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです」。具体的に、人々の益となるように努めていますか。

* 自分に与えられている聖霊の賜物とは何でしょうか。

+ あらためて、洗礼を受けた動機、目的を確認し、自分のためではなく、皆のために生きるように。

* 優越感、階級、昇進などの価値観ではなく、キリストのように人々に仕える価値観に生きるように。

福音朗読 (ヨハネ 20・19～23)

味わう

* 主イエスが復活されたのは、「週の初めの日の夕方」でした。それは新しい創造の始まりです。この世と人間の創造のとき、「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記 2・7)のと同じように、主イエスは、弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と言われました。

* 「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」ことが分かります。

* 「だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」ということばについていろいろな解釈があります。しかしまず、神にとっては、ゆるすということは恣意的な行為であるよりは、神ご自身の本質そのものです。「神は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、いつくしみは大きい」(詩編 103・8)方です。

* 「だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」のですから、人間関係において、傷つけられたとき、何とかして、罪や復讐等に支配されないように、主イエスに倣ってゆるさなければなりません。ご自分を裏切って、受難の苦しみをともにすることができなかつた弟子に「あなたがたに平和があるように」とイエスが語るのは、「あなたがたをゆるします」という意味にとれます。相手の罪や非礼をゆるせばゆるすほど、心が喜びと自由にあふれ、社会、教会、家族は良くなります。

祈る

- * 今日こそ、聖霊降臨の祝日に、
 - + 「聖霊を世界にあまねく注いでください」、
 - + わたしたちの心にも、あまねく聖霊を注いでください、と
 - + 聖霊に祈る必要。
- * 集会祈願にあった祈り。「聖霊を世界にあまねく注いでください」
 - + ゆるしの霊、喜びの霊、一致の霊、賛美の霊、感謝の霊
- * 「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」(創世記 4・7) ですが、ゆるせるように、主の祈りを心の底から唱え、罪や悪の力に対抗して、平和を実現する人になりますように。

生きる

- * 「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。遣わされているわたしたちは、外に向かって、人々の間に、人々の中に、救いの喜びを放って生きるように。
- * わたしたちの使命を確認します。
 - + 神のゆるしを受け、人をゆるすこと。
 - + 神の平和を恵まれて、誰とでも平和のうちに暮らすこと。
 - + 神への望みを注がれて、「絶望のあるところに希望を」もたらすこと。

共同祈願の結びの祈りより

「いのちの源である神よ、あなたは聖霊降臨の出来事を通して、使徒たちを宣教の方へ遣わされました。わたしたちが絶えず聖霊に支えられ、力強く、福音を告げ知らせることができますように」